

世界中に熱狂的なファンをもつピーピング・トムが2年半ぶりに再来日、PLATでは2017年『ファーザー』2023年『マザー』に続く3度目の上演です。最高傑作といわれる今作『トリプティック』は、オランダを代表するダンスカンパニー、ネザーランド・ダンス・シアター(NDT)の委嘱作として誕生した「ミッシング・ドア」(2013年)、「ロスト・ルーム」(2015年)、「ヒドゥン・フロア」(2017年)を、ピーピング・トムがオリジナルキャストで再構築した特別な三部作です。

——ピーピング・トム作品の舞台美術は、毎回映画のセットを思わせるような設えです。それでいて、作品自体は、あくまで身体を通して人間の内面を深く掘り下げる場面が強い印象を残します。2024年に日本でも上演されたNDT『ラ・ルータ』も、ダンスという枠組みを超えた演劇的な空間でした。この「三部作」のアイディアは元々どこから来たのでしょうか。——当初は、第二部、第三部を作ろうとは考えていませんでした。しかし、一作目である『ミッシング・ドア』でガブリエラが考案した舞台美術を見たフランクが、このカップルの物語の続きを描くのはどうか、と考えたのです。旅の象徴である船、終わりのない廊下、互い

Interview:

に繋がりが合ったいくつもの部屋…『ミッシング・ドア』というこの迷宮には、いくつもの部屋が、そして物語が潜んでいます。この三部作は元々『adrift』(漂流)というタイトルだったのですが、漂流する物語の続きについて語るのはどうか、と思い至ったのです。

『ミッシング・ドア』でガブリエラが扱っているのは、死の直前の一瞬です。人生の全てを振り返る内省の瞬間です。映画の撮影を思わせる場面をフランクが非常に気に入って、ガブリエラの作品が終わったところから、そのまま続き(第二部)を作り始めました。「ミッシング・ドア」つまり「見つからない扉」というのは、人間の精神と身体の中のあらゆる扉のことです。フランクは、その扉の向こう側で何が起きているのかが知りたいと思ったのです。ですので、登場人物たちを部屋の中に配置してみて、そこから、ここは客船なのではないかというアイデアが浮かびました。移住者たちの道程が交わる場所としての船。どこかを立ち去ることを決めた男女。その物語を描こうと決めました。二人の旅路は、誰もが何かを追い求めている人生という旅の象徴なのです。そのなかで思わぬ事態が起こることもある。その先の第三部では、ついに自然に身を任せることを

受け入れた人間の姿を描いています。自然そのものが二人の旅を導き、終着点へと誘うのです。その末に二人の間に何が起こったのかは、観客の解釈に委ねたいと思いました。錯乱による幻覚なのか？二人の関係が終わりを告げるような出来事が起こったのか？そういう物語を紡ぐためには、三部作という形が最適だと考えたのです。

——2025年の日本ツアーではぜひ『トリプティック』を上演したいという要望が、ピーピング・トムの皆さんからあったと聞いています。

——私たちの作品を見るのは、ホラー映画を観に行くのに似ていて、少し怖い思いをするかもしれません。ピーピング・トムでは、人生というドラマを舞台上に描き出すことを大切にしています。それは強いリアリティを持ったものですし、非常に個人的なレベルで共感可能なものです。だから恐怖を伴うのです。私たちは、登場人物たちがどんな恐怖を抱え、どういう風に思考し、何を夢見るだろうかと、深く考え創作します。こうした要素から出発して、より深く、深く、できる限り深いところまで行くのです。そうすることで、自分たちでも意識していなかったもの、あるいは意識しないようにし

ているものを呼び覚まそうとしているのです。人間の潜在意識というのは、奇妙で恐ろしい場所なのです。

私たちは、昔から日本映画に対して同様の印象を覚えています。きっと日本の皆さんに『トリプティック』を楽しんでいただけるのではないかと思います。

——ピーピング・トムは現地のシニアキャストを起用する作品も多いですね。過去、豊橋でも公募して出演していただきました。数時間のリハーサルと本番の2日間でしたが、非常に濃密な時間を過ごし、いまでもランチをしたり連絡を取り合う交流が続いています。

——皆さんが今も連絡を取り合っているとは知りませんでした！素晴らしいことですね。『トリプティック』で募集する現地キャストは『マザー』『ファーザー』より少ないのですが、こうした取り組みが豊橋で長く続く繋がりを生み出していると感じ、心が温まる思いです。『マザー』と『ファーザー』は家族についての物語です。現地キャストの間に新たな「家族」を生み出したというのは、とても面白いですね。

——最後に豊橋の観客にメッセージをお願いします。——日本の皆様に『トリプティック』をお見せするのがとても楽しみです。日本ツアーという物語の一章として、豊橋に伺えることに感謝しています。

ピーピング・トム
ガブリエラ・カリーソとフランク・シャルティエによって2000年に結成。未知なるダンスの創造を目指してカンパニーを「ピーピング・トム＝覗き屋」と命名する。ダンサー、俳優、オペラ歌手ら、国籍も世代も多様なアーティストたちが生み出す脅威のパフォーマンスは、伝説の舞台としてダンス史にその名を刻む。『ヴァンデンブランデン通り32番地』、『ラ・ルータ』にて英国オリヴィエ賞「最優秀ダンス作品賞」を受賞。

ガブリエラ・カリーソ
コルドバの舞踊学校を経て、95年よりLes Ballets C. de la B. のメンバーとして活躍する。NDT『ミッシング・ドア』『ラ・ルータ』、ミュンヘン・レジデンツ劇場『ザ・ランド』演出のほか、ベルギー映画『キッド』に主演。2025年6月、ピーピング・トム最新作『choroniques』を発表。

フランク・シャルティエ
20世紀バレエ団ベジャール・バレエ・ローザンヌを経て、ブレルジョカージュ、ローザス、ニードカンパニーらの作品に出演する一方、Les Ballets C. de la B. に参加。ヨーテボリバレエ(スウェーデン)、マルセイユバレエ(仏)への作品提供のほか、オペラ『ディドとエネアス』、ピーピング・トム『S 62°58' , W 60°39'』、NDT『ロスト・ルーム』『ヒドゥン・フロア』を演出。

脅威の身体能力と奇想天外なイメージで紡ぐ

ピーピング・トム 『トリプティック』

「ミッシング・ドア」「ロスト・ルーム」「ヒドゥン・フロア」

10月11日[土]14:00開演

構成・演出＝ガブリエラ・カリーソ、フランク・シャルティエ

会場＝PLAT主ホール

